
ここが願いの終着点

水沢 流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ここが願いの終着点

【Nコード】

N6804Y

【作者名】

水沢 流

【あらすじ】

「異界に行ったら、理想の自分の姿になる——ってのがセオリーじゃないの!？」
最強脇役と、わりと普通な主人公が繰り広げるSF風味のファンタジー。

死ねばいいのに

ドオン！ と派手な爆炎が上がった。

ブツ飛ばされるクリーチャーの群れ、こつぱみじんに砕け散る窓ガラス。

豪快に爆裂したビルの中から、銀月の夜空へと男のシルエットが跳ね上がる――

「イヤッハア！」

高らかに歓喜の声を上げて、片手にひっつかんだクリーチャーを地面へと叩き付ける男。

ザンツ、と着地したそいつの足元で、砂塵と化したビルの破片が散った。

「ただいま、セーコ」

にイとワイルドな笑みを浮かべた男がアタシに言う。

黒髪に赤い瞳。引き締まった体。

そいつに向けて、アタシも笑った。

たった一言――そりゃもう、最高の笑顔で、

「死ねばいいのに」

アタシは晴子。ごく普通の学生だ。

いや、学生だった。

それがちよつとした事でこの世界に来て、帰れなくなっちゃったりする。

特別な血筋だとか、世界をどうこうするために呼ばれたとか、別にそんなやつじゃない。

まあ、その話は後にするとして。

ここはゲルナム。アタシの住んでいた世界からすれば立派な異世界だ。

で、ここでアタシのパートナーと言うか、腐れ縁になった野郎が」。

最初に会った時は、どっかの俳優かとマジで思った。

そう言う外見だ。

軽くメタル入った格好も、違和感無くキマってる。

黒いライダースーツに金具を絡め、襟元を大きくはだけさせた独特のスタイル。

アタシ達の世界なら、そう言うのが好きな奴に追いかけられそうな外見だ。

だけど、アタシはどうにもコイツと相性が悪い。

「ちよっとは愛想良くしようぜー、レディ」

ずかずかと歩くアタシを、良く通るハスキーボイスが追いかけて来る。

振り返りざまにそのツラを睨んで、アタシは溜息をついた。

「ビルまるごと吹っ飛ばしといて良く言うわ。謝れ。とにかく謝れ」

「それもそうだな」

「わかればよし」

「悪かった」

シユタ、と片手を上げて」が詫びた先は、

「おいコラ待てや」

誰が爆心地に謝れと。

「……もういい、怒る気なくした」

ふう、とため息をついて遠くを眺め、聞こえて来るヘリの音に耳を傾ける。

あー、空が綺麗で目が痛いわ。この痛さは明らかに煙のせいだけだ。

「何でアンタなんかと、なあ……」

男嫌いで近所中に知れ渡ってたアタシが、よりにもよってコイツとだなんて。

別に男にトラウマがあるわけじゃないけど、乙女ちっくな事ばかり望まれてウンザリしたんだよね。うん。

「つれねエなア。あんまり怒ってる的可愛さに欠けンぜ？」

「そりゃあ悪かったっ！」

涼しげな顔でほざくJに、適当な瓦礫をブン投げる。

ぱし、とそれを片手で受け止めたJの、やったら余裕の顔と言ったら！

むかつく。マジむかつく。鼻血ぐらい出せよ、せめて。

フンと鼻を鳴らして背中を向け、アタシはまた歩き出した。

「ほんと、死ねばいいのに」

——殺しても死なないような奴だけどさ。

初めてこの世界に来た頃、アタシは色々な事に腹が立ってて、目の前に現れたクリーチャーに怯えるより前に、こんなふざけた死に方があるのかって頭に来た。

それだと思った。

どーせ死ぬんだ、全部くたばれ！

目の前のクリーチャーも、偉そうに建ってやがるビルも全部、ブツ壊れちまえばいい！

——そう思った瞬間、飛び出して来たJがそいつをやったのけた。ポップコーンみてえにクリーチャーが吹っ飛んだ。

ビルが、紙きれみてえにスライスされて崩れ落ちた。

ゲームでそう言う場面を見た事はあるけど、マジで見たのはそれが初めて。

良く出来たセットじゃねーのと思った途端、Jの破壊旋風が終わった。

」。ただの」。

ジャックとかジョーカーとか、みんな好き勝手に呼ぶ。早足で歩くアタシの後ろを、のんびりと着いて来る」。

アタシは先を歩きながら、せめて何かにつまづいてコケればいいのとか、そんな事を考えていた。

そうこうしてるうちに、風を切るプロペラ音とエンジン音がけたましく鼓膜を叩いた。

ふと落ちた影の下から、額に手をかざして上空の音源を見上げる。機体の横に、吠え猛る龍の模様が刻み込まれたヘリは、アタシ達の雇い主であり家主でもあるアデリアさんのもの。

「早い迎えだな」

「そりゃあ、アタシが呼んだから——ってちょっと待て！」

制止間に合わず、すいっと持ち上げられるアタシの体。

次の瞬間には、体が浮いた。

いや飛んだ。アタシが飛んだ。

気付けば重力とは逆方向に、ぽーんと花火のように打ち上げられてました。

「ちょ、ジャーッ!？」

みるみる遠ざかる地上で、アタシをブン投げた張本人が笑ってる。その爽やかスマイルを見下ろして、アタシはスウと息を吸い込んだ。

ここでアタシが唯一使える能力。というか変換機を介して使えるようになった能力。それが、

「ふっざけんなこの……」

いわゆる大声を破壊力にするって奴で、

「クソツタレがーッ!」

叫んだ途端、グワツと辺りの景色が大きく歪む。

直後、ビル1本分の十円ハゲを作られた街に、五百円ハゲぐらいのクレーターが爆誕した。

「大丈夫？ セーコちゃん」

「あ、ありがとうございます……アデリア、さん」

ゼーはーゼーはーゼーはー。

空中に紐なしバンジーされたアタシを拾ってくれたヘリの中で、息も絶え絶えに返事をする。

「……死ぬかと」

生きてますが。

一瞬、マジでお花畑見えたよと胸に手を当ててへたりこむ。

倍速再生されてそんな心音が指に伝わって、どれだけ自分がビビってたかを再認識。

それを落ち着けながら大きく息を吸って、アタシはアデリアさんに提案してみた。

「Jの奴、ここに置いて行きませんか？」

そう言った途端、ドン、と言う重い音と共にヘリが揺れる。Jだ。

「……アンタ、ヘリ必要なくね？」

ひょいと顔を出し、ヘリの上に着地しているJに声をかける。

と、くあ、とのんきにあくびをかましたJが、その表情のままアタシを見た。

「……眠くて」

「落ちてよろしい」

親指を下に向けたアタシに、Jが片手をヒラヒラと降る。

それを見届けて、アタシは窓から頭を引っ込めた。

ふと気付けば、アデリアさんが妙に微笑ましくアタシを眺めている。それに何となく気まずさを覚えて、アタシは外へと視線をそらした。

アデリアさんは、いわゆるラテン系のおねーさまだ。褐色の肌に彫りの深い顔立ち、そしてスレンダーな体つき。

見た目に反して、戦闘のプロフェッショナルでもあるおねーさま。そんな彼女の顔を映す窓を通して、アタシはぼんやりと空を眺めていた。

ゲシュペンスト

うーん、景色がいいっ！

マンションの最上階、青空間近、見晴らし抜群のスイート・ルームに到着するや否や、やばったい上着を放り投げて窓に駆け寄る。広々と町を見渡せる大きな窓から見る世界は、まるでドラマの一場面のよう。

そんな贅沢感溢れる部屋こそが、アデリアさんとアタシ達の住む場所だ。

…や、持ち主はアデリアさんですけどね。

スピーカーから流れるボサノバも、広々としたリビングも、何もかもがセンス良くまとまっている。

普通、こう言う部屋って成金趣味でケバくなるもんだけど、そうならねえのがアデリアさんらしさなんだろう。

「ねー、アデリアさん」

「何？」

「Jって……つまり、何？」

ひとしきり景色を堪能した後、カウンターに歩み寄って椅子に腰掛けるアタシに、キッチンに立っていたアデリアさんが振り返る。

先進文明——なんて言うともっとメタルちつくなイメージなんだけど、そう言われなければわからないぐらい、ここにはアタシの世界そっくりな日常があった。

良くわからんが、ここはそう言う「エリア」らしい。まだ他に行った事はないけれど、この世界ことゲルナームには、場所ごとに「地方色」みたいなものがあるそうだ。

ようするに町の雰囲気を大事にしましょう運動みたいなもので、アタシ達の住んでいた町のような雰囲気を作る事が、この場所の売りであり特徴らしい。

「せっかくだし説明するわ。あ、セーコちゃん何か飲む？」

そうたずねてくれるアデリアさんに、こくりと小さくうなずいてみせる。

それから数分もしないうちに、アデリアさんが銀色のケトルの湯をティーポットに注いで、紅茶を一杯淹れてくれた。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

シンプルな白いカップが、渋味の少ない紅茶のはちみつ色を引き立てている。

あ、いい香り。

「普通に湯で淹れるんですね……」

「そうじゃない方法も取れるけど、こっちの方が好きなのよ」

なんか落ち着くでしょ？　と言いながら流れるような動作で椅子に腰掛けたアデリアさんに、カップ片手にうなずいてみせる。

確かに、映画みたいにウィーンって機械でカップが降りてきても雰囲気出ないですもんね。

「セーコちゃん、音叉って知ってる？」

「音叉は……何となく。叩くと音が共鳴するってアレですよ」

いまいち自信ないけど。と、口ごもった最後の方をごまかすために紅茶を一口する。

それはどうやら正解だったみたいで、アデリアさんが笑顔でうなずいた。

「Jはね、ゲシュペンストなのよ」

げしゅ……？

唐突にアデリアさんから告げられた単語に、お勉強ニガテな脳内が一気にオーバーヒートする。

そんなアタシの表情を見てピンと来たのだろう、アデリアさんが「種族名みたいなものよ」と解説を入れてくれた。

「セーコちゃんみたいな人がね、時々、こっち側に流れて来るの。」

そうするとゲシュペンストが対で生まれ、「みたいなのができるってわけ」

そんな風に言うアデリアさんの口調は、ずいぶんと言葉を選んでいるような調子だった。きつと、もつと複雑な仕組みがあるのを、アタシに合わせて簡単に言い直してくれてるんだらう。

「で、セーコちゃんと」との関係は、その音叉に近いわ。共鳴者の人が精神活動していないと留まる、共振の石」

「石…ねえ」

そこで雑誌読んでるあれが石コロですかい。

長身の体をソファに横たえて、頬杖付きながら堂々とまあ、余裕なこつて。

「活動してないと停まるわりにゃ、アタシが寝てても動いてますけど。あれ」

「一回共振すれば、当分動けるのよ」

「…はあ」

わかるよーな、わからんよーな。

とりあえずアタシが来たから」が生まれて、アタシが死ぬか何かして精神活動が停止すると、」もいずれ消える。

ともかく、そう言う事らしかった。

と言うか、それぐらいしか理解できませんでした。はい。

「んで、アタシが来て」が生まれたとして」

「ええ」

「最初からあの格好で生まれて来るんですか？」

「違うわ。『原野』『深層』『集合意識』『混沌』『坩堝』…まあ、私達ミューdiamによって呼び名は色々だけど。」はそこから私が拾い出したの」

「…」

「世界が違えば、呼び出したとか召喚したって言うのかしらね。ゲシュペンストって最初実体がなくて、波長が合う形にしか固着しないのよ。ゲシュペンストの望む形をどこまで構築できるかが、私達の腕の見せ所ね」

「…はあ」

つまり、気に入った器にしか入らない幽霊みたいなモンですね。こう、日本人形の髪質が気に入らないと宿らない呪い子さんとか。なんて贅沢な奴なんだ、と腹が立つてくる。アタシらなんて、見た目選んで生まれて来れねえってのに。

「不公平だ」

ぼやき、相変わらず悠々と雑誌読んでる」をチラ見して、ふう、と大きく息を吐く。

そんなアタシの小声が聞こえたのか、アデリアさんがエキゾチックに微笑んだ。

「セーコちゃん、なりたかった自分ってある？」

「……ええ、まあ、一応は」

オナオナ言われるのが腹立ってたんで、自由奔放に生まれたかった。

それで、できれば女じゃなくて男が良かった。ちっさい背丈が嫌だったから、できれば高めの身長で、運動能力は抜群が良かったよ。」

思わず、視線が」と合う。

いやいやちよつと待て、違う違う。何かが違う。違いますかアデリアさん。

慌ててぶんぶんと頭を振るアタシに、アデリアさんがくすくすと笑う。

「……ヤな予感がした。」

「まあ、あなたのなりたかった自分って事ね。とても簡単に言っと、そういう存在よ」

——はい？

思わずぽかーんとしたアタシの目の前で、にこにこアデリアさんが笑ってる。

ああ、何てまぶしい笑顔。

美女の笑顔って、こんなに破壊力のあるものなんだろうか。

その手の趣味はないけど、屈託なく笑うアデリアさんの前では何

も言えなくなる。

直後、ぶわつと頭に血がのぼった。マジで。

「……」

思わずまたJを見る。

あれがアタシの理想？　って言うか、アタシの理想ってあんなチヤラ男じゃねえし、だいたい今の言葉ってJに聞こえてんじやねえの。

むしろ最初から知ってたとか——そう考えると、こっちが落ち着かなくなつて来るんですが。

「……あの」

「なあに？」

ほがらかに聞き返して来るアデリアさんから視線をそらし、思わず下を向く。

それから、アタシは机の下で指を組んで、ぼそぼそと小声でつぶやいた。

「……それ、ずるくないですか」

いやだってホラ、異世界召喚ってのは普通あこがれの自分になれてバンザイー！とかそう言うのがセオリーつつかなんつつかですね。

そう思っている間にも恥ずかしさと腹立たしさで顔面が熱くなつて来て、反射的に椅子から立ち上がる。

「J、ちよつとベランダに出てくれる？」

「いいけど」

不思議そうな顔でベランダに移動したJに、つかつかと歩みよるアタシ。

そして――

「納得いかんわーっ！」

泣き笑いの激情をありつたけ込めた絶叫の砲撃で、アタシはJを大空に向けてかっぱした。

切片

「何か、こうして見ると異世界って感じがしないよな……」

マンションから出て、夕暮れ通りを歩きながら辺りを見渡してふと呟く。

見えるのは普通の公園。普通のブランコ。普通の街路樹。普通の家。

「……………」

このまま真っ直ぐ行ったら、見慣れた通学路に出るんじゃないかとさえ思えて来る。

それぐらい、ありふれた光景がそこにあった。

「……実感わかねー」

先日、盛大にビルごと「」にぶっ飛ばされた辺りが、もう何事も無かったかのように公園と化している。

そこに足を踏み入れ、ベンチに腰掛けてアタシはふらりと空を見上げた。

だんだんと暗くなって行く空もまた、見知った町そっくりだ。それを眺めながら、アタシはココに来た日の事を思い出してた。

最初は、本気で死ぬつもりだった。

別に嫌な事があったからじゃない。

ただ何となく、面白いと思える物が減っていた。

テレビつけられくっだらな暗いニュースばかりで、天気は例年に無い何とかか何とかで。

その例年っていつよとツッコミ入れたって、どーせリポーターは答えちゃくれない。

不況がどーたらこーたらでお先真っ暗、恋愛記事は男女の妄想の吹き溜まり。

なんたら活動って何それ楽しいの、それでもって親はうるせえし束縛するしでうんざりだった。

「ねー、セイ」

「…何」

不意に話しかけて来た幼馴染、純子の方へと顔を向ける。

彼女はバリバリのギャルだ。

純子って名前が気に入らないからジユンと呼ばせる。

周りにも、アタシにもだ。

そして、アタシの晴子もセイと呼ぶ。

アタシとは全然見た目も違う、趣味も違う。

なのに、何でかジユンとは付き合いが長くなった。

何でって言われると良くわからんけど。

「三丁目にさあ、怪の落書きってのがあって。それ見ると次の日異世界に行けるんだって」

「ふうん」

「こっちの肉体は死んじゃうらしいけどね。ねえセイ、見に行こうよ。見れたら最高じゃん？」

「ハア？」

思わず声が裏返った。

何言ってるの、ジユン。

お洒落して、ダチと騒いで。アタシよりずっと充実した人生送ってそうなのに、一体何なの。

やりかけのゲームのコントローラーを放り投げ、顔だけそっちに向けて眉をひそめる。

画面では今まさにイベントがクライマックスに突入する直前だったが、そんな事はどうでもよくなっていた。

「セイ、あのね」

膝の間、綺麗にデコった爪を揃えてジユンが笑う。

フリルスカートの花の中、宝石みたいにキラキラと爪が光ってた。
「何かさあ…飽きちゃったんだ」

「飽きたあ？」

「んー、先が無いって感じ？」

ジュンはあるまり、言葉選びが上手く無い。

「ちー子もサッチもガツコのみんなも嫌いじゃないけどさ。何だろ…付き合いつけて行こうと思ったら、興味無い話題でもとりあえず付き合わなきゃじゃん」

「まーね」

それが嫌だからアタシはネットを居場所にしてる。

めんどくさくなったら逃げられるし、三次元に王子様探すほど、自分をわきまえて無いわけじゃない。

それでも、それなりにネット内で付き合いはあったし、ゲーム仲間で盛り上がりたりで、まあ退屈はしていなかった。

充実してるかって言われると、正直、微妙だったけど。

「ジュンらしくないなあ、どうしたんだよ」

「んー、だってやっぱりカレシ出来たら女の友情よりカレシじゃん？ 何っーの…むなしってかさあ」

「…まあね」

ネットに広がるどの記事を見ても、現実に満足している大人なんていない。

大人っていいなー、なんて憧れるお子様時代はとくに終わってる。

判るのは、腐った現実に向かって阿呆みたいな世間体気にして、そんでババアになって死ぬだけだ。

大人になったら判るとかほざいてる連中見ると、全っ然判りたくねえと思う。

無料ゲームも世にあふれてるけど、一周しちまえばそれでおしまいい。

新作新作って騒いでも、どれも似たり寄ったりだ。

「いいよ」

だから、その噂に対してOKしてみた。

良くある話だ。あの世と繋がっている門とか、死んだら実は異世界に行くとか言う系統。

半分信じて、半分信じちゃいなかった——けど、今本当にここにいる。

ジュンがどうなったかは知らないけど、少なくともアタシは『異世界』にいた。

最初は自分を疑った。

実は事故に遭って、アタシはどこかの病院で寝てて。

これは、そんなアタシが見ている夢なんじゃないかって。

でも、疑っても疑っても夢が終わる事はなくて、結局、考えるのがめんどくさくなった。

いつか醒めるなら、醒めるまで勝手に続けばいい。

……そう思ったら、ちよつとだけ気がラクになった。

「こつちでも、空は同じなんだな……」

背凭れによりかかり、そんな事をばやいてしていると、ふと、後ろから影がさす。

くるりと振り返ると、そこに「がいた。

「よう、セーコ。腰痛か？」

「……殴るよ」

人が感傷に浸ってる時に空気読めよ。って言うか、それ以前の話題にだな。

「なあ」

「うん？」

「アタシに用事ある時は寄り道しないで真っ直ぐ来いって言ったよな」

「ああ」

涼しげな顔でうなずき、背後のしげみを指差す」。そこに、ぱつかりと切り開かれたしげみがあった。公園の外からここまで——ただまっすぐ一直線に。

「大型トレーラーかアンタはっ！」

誰が道路からしげみブチ抜いてまっすぐ来いに行った！

ぜえはあと声を荒げ、深々と息を吐く。

「いくら戻るって言っても、アタシ、そのしげみに同情するわ……」
ほんと、ひどい姿になっちゃって。

猫にむしむしされた後のカーペットみたいじゃないの。

「それで何、また仕事？」

「ご名答。どーせヒマだろ、付き合えや」

「……」

「どした？」

「……なあ」

「おう」

「アタシをのんびり寝させろやあ！ このアホンダラっ！」

昨日今日で仕事に駆り出すな、二度寝させろ！

そんな、仕事まみれのサラリーマンみてえな事を叫ぶアタシの声が、むなしく夕暮れに溶けて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6804y/>

ここが願いの終着点

2011年11月28日03時10分発行